

(4) 未災地で取り組む防災教育の課題

木下 祐介 (大阪市立瓜破西中学校)

川島 彰允 (大阪市立鶴見橋中学校)

木下：私たちは未災地で取り組む防災教育の課題について、今回発表させて頂きたいと思います。はじめに、今日初めてお会いする先生方もいらっしゃると思いますが、私たちは昨年度12月に黒潮町で開催された第3回に、鶴見橋中学校で実践してきた防災教育を発表させて頂きました。正直参加する前は、何もわからない二人が、そのような場所に行ってもいいのかと思っていたのですが、参加させて頂き、非常にたくさんの先生方からねぎらいの言葉を頂きました。それだけではなく、全国各地にこのような素晴らしい先生方や取り組みをされている学校があるんだということを知り、今回感謝の気持ちを伝えたいという思いで、自ら立候補させて頂きました。

まず、『現状と課題～それぞれの立場から～』と書かせて頂きました。私は3月をもちまして8年間勤務した鶴見橋中学校を離れました。春から同じ大阪市内の瓜破西中学校に勤務しております。一方、川島先生のほうは引き続き鶴見橋中学校に勤務しています。昨年までは二人一緒に現場で働いていたのですが、春からお互いが離れまして、この半年いろいろなことを抱えてきました。その中で現状と課題を伝えさせて頂きたいと思っております。

『新天地 思いを行動に移せない現実』ということで、私は鶴見橋中学校で非常に濃い8年間を過ごしまして、本当に子どもたちにたくさん学ばせて頂きました。またそれだけではなく、鶴見橋中学校でしか経験できないようなたくさんの経験をさせて頂きました。そして、今回初めての転勤でしたので、「よし、次も頑張ろう」という意気込みで行ったのですが、正直この春からこういった教育活動を何もできない現状が続きました。実際本当にやりたい気持ちもありますし、どこから何をしたいのかちょっとわからないような状況でした。いろんな理



木下 祐介 (大阪市立瓜破西中学校)

由があるのですが、大阪市内に130校の中学がありまして、『未災地』というタイトルを付けさせて頂いたのですが、災害が起こっていない地域ということで、全ての学校が防災教育に熱心に取り組めていない状況です。

本校も川が近い地域にあるので、台風での災害等も想定されているのですが、正直なところ、なかなかそれを学校全体で何かやろうかという動きがまだ見られていない現状です。そんななかで、自分自身もクラブ活動が盛んあったり、地域や家庭環境など、前任校とのさまざまな違いから、なかなかそういう教育活動に踏み込めない現実があります。何かしたいという衝動があるなか、一人の担任としてクラスの子どもたちに学級便りや学活等で、命の大切さや防災に関することを伝えるということから少しずつ始めているのが現状でございます。

川島：木下先生が抜けてからの鶴見橋中学校で、一番の課題は何かというと、先生があげられたハードルを持続していくことの難しさを本当に痛感しております。知識とか情報、マニュアルなど、様々なことは残して頂いたのですが、「中心となって牽引して頂いたリーダーの思いを、新しい方法で自分よりも若い方に伝えていくのか」ということの難しさを本当に痛感したこの半年間でした。

今回また発表の機会を頂いたことで、もう一度この半年を振り返ろうということで、何度も

話を重ねさせて、新たに見つかった課題や今後していくべきこともありました。また私達は3回目から参加させて頂いていますが、それ以前の報告書を見ると、その中にも様々なヒントが載っておりました。先ほどお話されていた田辺市での第2回の報告書の中に、指導案をまとめる際のエピソードをいくつか話されていて、その中で『やらされている』スタートだったのが、リーダーの強い思いによって『自分たちでやっている』という使命感ができてから、スムーズに物事が進んだ」ということも、自分たちも見習わなければならないなと思いました。

なぜ取り組みを持続していくのが難しいのかを分析しました。今までは木下先生も近くにおいて、「皆でやっていこう」という雰囲気が、やっていくうちに子どもたちが成長していくにつれて、やりがいが変わっていったのです。それが、「やらなければならない」という思いが今年大きく、「これをしなければならない」ということがたくさん増えました。学校全体が『防災＝やらなければならない』というようなイメージが今は強くなっている、義務的な取り組みになってしまっているのが現状です。

今日の協議会を通して、一つでもヒントを持って帰って、残りの2学期、3学期に繋げていけたらなと思います。

木下：自分自身も振り返った時に、最初は「やらなければならない」どころか、「なぜこんなことをやらないといけないのか」、どちらかといったら「やりたくないな」という気持ちからスタートしました。転勤したことをきっかけに改めて振り返り、なぜやりがいを超えて、「やりたい」にまでなったのかを考えてみました。

正直最初は部活動がやりたいだけの理由で教員になったのですが、何がきっかけでここまでなったのかというのを改めて考えましたときに、大きく5つのことで自分は変わったのではないかなと思います。

まず『①出会い』。何よりも活動することで



川島 彰允 (大阪市立鶴見橋中学校)

出会えた人たちです。恥ずかしい話ですが、自分自身いろんなことが20代前半にありまして、どちらかといったら、あまり人を信じられないというようなタイプで、人見知りを理由にして、あまり自分からは積極的にしゃべれない性格でした。今回の活動を通じて、特に東北の方とのたくさんの出会いがありました。最初のきっかけは無理矢理東北に行かないかって誘われて、勝手に飛行機のチケットを取られて、ただついて行っただけなのですが、そんななかで出会った方に心が変わるきっかけを頂いたように感じております。子どもたちもちろんですけども、何よりも自分自身がそれによって心が変わったのではないかなと思っています。

次に『②変化』、人からの学び、心の変化ということなのですが、出会った方は先生方だけではありません。学生さんもいましたし、地域で活動されている一般の方にも出会いました。そういう現地の方に、実際に会って話を聞くことで、今まで自分は何をしていたのかというような思いが、本当にたくさんありました。そのなかで、「やらなければならない」と思いました。これはさっきの「やらなければならない」ではなくて、大阪でこの職業に就いている人間として、「何かやらなければならないのではないかな」という衝動にかられました。ということで、心の変化が大きかったように思います。実際に本当に覚悟を決めるといいますか、そういった変化を頂きました。

『③つながり』ということで、これは自分もずっと心掛けていることですが、出会いをご縁に変えるということで、一度きりの出会いではなく、そういったことを二度三度と積み重ねることによって、その人たちとももっともっと繋がっていくようになっています。先ほど片田先生が仰っていたように、昨年の12月以降、ここで出会った先生方のところに、実際にお伺いさせて頂く機会を得ました。石川県の能登町であったり、和歌山県の田辺市の先生方のところにお伺いして、学校の様子やその地域の現状を生で見させて頂いたことで、更に自分自身が深まりましたし、何より自分の学校の子どもたちに還元することができました。子どもたちも釜石東中学校さんを何度も訪問させていただきました。昨年もお伝えしたのですが、1月には今まで伺っていた岩手県の大槌町の学生さんが、実際に鶴見橋中学校に来て下さって、交流を深めることができました。そういうことが重なったことで、自分自身が高まったように感じております。

そのなかで学ぶだけではなく、伝えたいというような気持ち(『④アウトプット』)に変わっていききました。学んだ本気の思いを発信するために、たくさんの発表の機会を得ることができました。教室の中から始まりまして、全校集会、地域に出て行くなかで、子どもたちの姿を見て、素晴らしい教育活動だなと思いました。この頃には完全にやりがいになっていました。子どもたちだけではなくて、私たちが昨年も含めまして、多くの場所で発表させて頂いたことで、気持ちが変わったように感じております。

最後の『⑤達成感』ということで、実際に子どもたちの成長を目の当たりにしたことをあげました。いろんなメディアに取り上げられたり、表彰して頂いたことも嬉しかったのですが、何よりも目の前の子どもたちが、目が輝いたり、本当に生き生きと活動するようになったことで、自分自身が本当に変わったなと感じております。

タイトルにも『心を変えて自主性を育むため

に』ということで書かせて頂いたのですが、大阪でなかなかそういうのが広がらないのが課題と思っていたのですが、まず自分自身の心を変えて自主性を育む。自分自身が、矢印を向けて何かやることで生徒にも伝わる。その伝わり方が変わったのではないかなと感じておりますし、そのことで子どもたちも変わっていった。というのが、実際に経験したことでございます。

川島：今のお話も何度も木下先生から聞かせて頂いて、僕自身ももう一度この機会に改めて大切だなと思わせて頂いたのですが、大阪の地でこのような取り組みをさせて頂いて、皆様方から教わるができるというこの機会が本当にありがたいものだと感じています。そのような我々にとって、防災教育は、『共に学び共に育む』ということで、『防災“共”育』という言葉であると強く感じています。

今回のような取り組みがなければ、出会うことがなかったある東北の先生に、『教師を育てるのは生徒』という言葉をお教えました。先ほどの発表のなかで、『生徒主体の』というキーワードがありましたが、本校もその言葉を頂いて、取り組みを始め出してから、防災教育というものが、教師と生徒が教える側と教えられる側ではなくて、正面から命に向き合うというような取り組みができるということをやりがいいと感じたことを思い出しました。

また、被災地と未災地という言葉を使っていますが、被災地から何かを与えてもらうわけでもなく、未災地だから募金活動や支援をして何かを与えるのではなくて、共に与え合う、育て合うというような形で経験ができることも、先ほどの交流などを通して感じることもできました。私たちは未災地の中で数少ない幸せな機会を頂いた学校だと思っています。この防災教育を日本中に広めるために、このような機会を大阪の一中学校の我々だけじゃなくて、様々なもっとたくさんの同じようにまだまだ防災教育に取り組んでいない学校にも、広げていって頂

きたいなと思います。

先ほど、今私の中学校で感じている「やらなければならない」という義務感と、木下先生がおっしゃっていた、「突き動かされて何かをやらなければならないという衝動、使命感」というのは、何によって変わるのかを考えたのですが、それはやはり先ほどメリットで仰っていたように、『人と出会ったことで受ける刺激』とか、『触発』、『心を揺さぶられる経験』だと思います。

昨年末にお会いした先生と今回この会場に入って久しぶりにお顔を拝見したときに、お話を少しさせて頂いて、「児童生徒と毎日こういうふうに寄り添ってプールの指導をしています」とか「いろんなことで頑張っています」というお話を聞いて、「こんな先生になりたいな」と思って、「僕たちもまた 2 学期から頑張ろう」という形で決意を新たにさせて頂くように、このような経験の場を様々な学校で、大阪だけでなくいろんなところで広がっていくことを願いながら、本校でも「木下先生がいなくても大丈夫です」と言えるように、大阪の代表と言えるように、しっかりと鶴見橋中学校も頑張りたいと思います。

木下：最後に『願いと希望』と書かせて頂いたのですが、この春から現実にぶつかりました。本当に同じ中学校でこれほど違うのかというので、非常に困惑しながら過ごしてきました。結局先ほど話した 5 つの経験が自分を変えたのですが、『①出会い』と『④アウトプット』というのは、やっぱり作って頂かないとなかなかできないのではないかなと実感しております。たまたま鶴見橋中学校がそういう取り組みをされていて、そのことで東北のほうに行かせて頂いたりしたことで、たくさんの繋がりや実践ができました。先日も大阪で勤務されている先生が、防災教育について聞かれたのですが、「実際何をしていいかわかりません」とか「何から手をつけていいかわかりません」という先生方がいらっしやいました。大阪の全ての学校がそういう交流

をできるわけではありません。自分自身もそうですが、子どもたちがそうやって繋がりがあったことで、思いが広がったと感じております。そのことで『②変化』と『③つながり』、あるいは『⑤達成感』というのはできてくると思うのです。偉そうなことを言いますが、他府県で頑張っている先生方、学校の取り組みを、こういった未災地の地域にもどんどん伝えて頂いたり、何か交流する場を作って頂くことで、大阪にも防災教育がもっともっと広まるように感じています。自分自身ももう一度一からやり直そうという気持ちで、また頑張りたいと思っていますので、今後ともよろしく願います。

ご清聴ありがとうございました。

【コメント】

大句：能登町立小木中学校の大句といたします。ちょっと語弊があったら申し訳ないですけども、木下先生は今までの 8 年間は、「そんなにやっていない」と言いながら、やはり手ごたえもあり、いろいろやってきた積み重ねの 8 年間であって、それが喪失したという感じだと思うんです。まだ移って 3 ヶ月なので、焦らずに自分の中で耕していると、何か見えるもの、新しい学校で「これいいかも」と思えるものが絶対出てくるんで、大丈夫だと思います。